

八野」

かやうに入野と書くが、こゝには屋野の意で

あつて、矢野社も同風土記に神門郡に在り、矢野若日女命を祀らる。(完)

房總以西太平洋岸の民族移動に關する

歴史地理的考察 (豫報)

——伊豆文化の研究 第二報——

耕 崎 正 男

本稿は前稿「駿相豆交界地方の聚落に對する歴史地理的考察」中の「三、文化發展の經路」に傍證を加へて若干詳述したものである。

目 次

- 一、三島神社及び伊豆の式内社
- 二、民族移動の因子及び南九州
- 三、南四國
- 四、近畿の南岸
- 五、伊豆に於ける漂着民
- 六、結 論

房總以西太平洋岸の民族移動に關する歴史地理的考察

一、三島神社及び伊豆の式内社

前述の如く古代民族の部落が出來た後、大和朝廷の勢力の東漸は日本武尊の御東征と云ふが如き形を以て現れ、此の地方が畿内に存在を認められてから、近畿の優等民族が入込んで地方の開拓が進み文化が向上したのである。

但し此の間、漂流民のあつた事を記憶せねばならぬ。即ち屢々南方から漂着したと云ふ古傳があり、又史上に現れて居り尙且伊豆の文化は

南方が早く進んだことは識者の等しく認むる所で、黒潮及び陸地の水平肢節の關係により必ずや西南の民族が來着し北進したことがあつたに違ひない。試に伊豆に於ける神社にしても二十六座の三島神社が海岸に分布して居る事實、又九十二に上る式内社の中、大社は五座で内四座まで南部にある。即ち一つは三島明神の本后阿波姫命を祀る阿波神社で、一つは御子神物忌奈命を祀る物忌奈神社で共に神津島に在る。残る二座は三島明神と后伊古奈比咩神社（即ち白濱神社）とで共に加茂郡東岸の白濱村長田に在つた即ち官幣大社三島神社は現三島町の式内社ではなく延喜時代には姫宮白濱神社と共に今の白濱神社の地に在り、名大神として威を四隣に揮ひ豆南の諸神を總監して居り、併も其の前は三宅島に在つたと傳へらる。のみならず、豆南諸島（舊三島郷）には式内社二十四の多きに上り内十二座は三宅島に在り、併も其の祭神は三島明神の后妃及び諸王子である。而して三島明神が三宅

島から渡來したのは白濱村長田區小長田の神明であつたと云ふ。而して白濱より直ちに三島に遷座したのではなく、狩野川の谷口聚落の一たる田中村に遷り姫宮福澤神社と共に田京の地に留まつたと傳へらる。（因に云ふ、福澤神社は今廣瀬神社といふ、祭神は溝檣姫命で、白濱神社と同じく伊古奈比咩命と異名同神である。同社神職西島善兄氏によれば元福澤神社と稱したのを徳川時代に深澤神社と改稱し、更に明治三十二年廣瀬神社と改めたものである。）抑々田京は先史原史の時代を通じて人類の住所として形勝の地であり其の遺跡に富むことによつても頷れるのみならず、斯る地區なるが故に既に當國最初の國府の所在地と推定せられ居り、旁々以て古傳の附會にあらざるを思はしめられる。斯くして國司に祭られ國府の三島移轉と同時に或は遅れて三島に遷座したのであらう。而して第百十四代櫻町天皇の寛保年間迄白濱の長田にその古祠を存したと云ふ。

更に「官幣大社三島神社明細帳」に

「事代主命出雲國御穗崎ニ昔柴垣ニ隱坐シ而後海上ヲ國求給

テ本國賀茂郡三宅島ニ寄り來坐テ鎮リ給ヒ後同郡白濱ノ地ニ
移リ座シ(此地ヲ大社郷長田村ト云)ヲ後世本國々府ヲ今ノ
三島ノ地ニ開地セルヲ以テ本社ヲ遷座シ奉レルナルベシ故ニ
此邊郡田方郡ヲ分割シテ君澤郡ト云シニモ拘ハラズ大社ノ
在ル所及社家村ハ依然賀茂郡ト爲セルモ其舊制ヲ存セルナル
ベシト。

これによつても三宅島及び白濱と關係あるべ
きことはうかがはれる。而して中世に三島神社
を遷祀してから此の地を三島と稱したらしく、
社地神領を田方郡とも君澤郡ともせず賀茂郡と
して明治九年に至つたことは明かである。

三島神社の祭神は多年大山祇命として尊信さ
れて來たけれども今は前記の如く事代主命と決
定されてゐるが、當社明細帳に

「發神の御事ハ明治五年十一月何ヒ定ムル所ナレトモ本社ヲ
大山祇命五座トシテ齋祀セシモ古キ事ニテ既ニ釋日本紀ヲ始
メ何クレノ書ニモ散見シ内務省藏版特選神名牒亦之ヲ是認セ
リ」

と附言し、三島明神の正體に關して大なる疑問
を残して居る。果して事代主命なりや。翻つて
高知縣土佐郡一宮村鎮座國幣中社土佐神社との

關係如關。土佐神社畧誌開卷第一に「發神一言
主神(中畧)又の御名を葛木一言主神と申し奉る
社記には大國主神の御子味鋺高彥根神と同神な
りと傳ふ」と。又同地方に於ては事代主命なり
とも傳へられてゐる。にはかに斷定し難しとす
るも平田篤胤の説に従へば一言主と事代主とは
異名同神なりと。果して然らば事代主命を祀る
三宅島の富賀神社及び三島大社と土佐神社との
關係如何も考慮するの要あらんかと思ひ土佐神
社に就いて一應質して見たが「關係なし」との
ことである。

清水吉彥氏は「祭神を事代主命と決定したの
は主として萩原正平氏で、氏の主として根據と
する所は三宅記なるも此の書たるや容易に信ず
べからず。」となし、又名古屋の一神職は「三島
大社の神主の家筋は代々出雲と姻戚關係にある
が爲其の邊の情實を伴ひしものなるべし。」とな
す。是亦記して大分の參考に供する。

然らば事代主命にあらざるかと云ふに、日本

書紀に「事代主神が入尋の熊鰐に化爲り三島瀾
織姫に通ひたまひ云々」等の記事を以てみれば
あながち否定すべきでもないらしく、さりとて
大山祇命とせば愛媛縣越智郡大三島の宮浦村鎮
座國幣大社大山祇神社と直接關係あり、當社が
攝津に勸請せられ更に三島に來たかといふに之
亦判明し難きも、否認するもの多く假に西方よ
り直ちに東遷したとすれば、遙南方の海上より
多くの顧眷一族を率ひて來たことと齟齬するこ
とになる。

今三島神社所藏の「白濱神社古傳書の内、三
宅島藥師緣起」を見るに末尾に、壬生御館末流
宮司原圖書長男原藤藏興之、とある。此の壬生
御館は元々富士の邊に住んだ神であり、末流原
家は代々白濱神社の神主である。此の古書が如
何程迄信ぜらるべきかは疑問の餘地あるも

「天竺の王子が異性のことから父王の意に觸れて國を後にし
唐土を経て日本に渡り——此の間暴風に會つた——奥伊豆に
來着し、諸神を役して豆南の諸島を開拓した。自分自身は主
に三宅島及び其の他の二島に居り勿論三宅島にも宮居を造營

してゐた。そして三宅島及び其の他の四島に各后を置き、子
孫の繁榮を來して土地の狹隘を訴へた、併し時々火山の活動
があつて土地を廣めはした。此の時に當つて役の行者が葛城
の明神と諍論して大島に流されて來た。伊豫大三島の明神は
此の役の行者を訪ねて大島に來た。……此の天竺の王子は即
ち藥師如來で後に股肱の臣壬生御館を伴うて白濱へ來た。」

と云ふのが大體の筋書で、この記事に従へば
伊豫大三島の祭神大山祇命とは別物で、伊豆三
島神社の祭神が地方開拓の先輩となる譯である
吾々はこの神が大山祇命であらうと、事代主命
であらうとよし又如何なる天神國神であらうと
海部種族であらうと、但しは天竺の若殿であら
うとも國土開發の大先輩に對する尊敬の念慮に
何等の變りもない。只吾々は文化開發の經路が
明らかとなればそれで満足である。

二、民族移動の因子及び南九州

そこで神の戸籍調は暫く措いて他面から觀察
することにする。先づ自然上よりすれば日本海
流と島嶼及び半島なるものが重大な役割を演じ
タイフーンも端役を務めてゐるらしく、又人文

上の手近い暗示としてはサバネーによつて海上に雄飛する糸満人である。又小牧助教が記、紀の示す天宇受賣神(天鈿女命)及び猿田毘古神(猿田彥神)を南九州から海上或は海岸傳ひに伊勢志摩とを結んで考へられた(地理教育第三卷)ことは愚考と一致し實に痛快である。

今筆者は日本海流とタイフーンとの双方に關係淺からぬ琉球と房總の畧々中間なる土佐に就いて聊か考察を試みたならば概畧を察し得ると思ふが、先づ西南から漸を追ふて眺めてみよう。

天平勝寶五年の冬遣唐大使副使の一行が歸朝の途次暴風に遭ひ阿兒奈波島に漂着したと云ふのは沖繩島であり、續日本紀に「天平勝寶六年太宰府奏、入唐副使吉備朝臣眞備、以去年十二月廿七日、來着益久島、自是後、自益久島進發漂蕩着紀伊國牟漏崎」とあるは、沖繩より屋久に北進し來り、再び暴風に遭ひ潮岬附近に漂着したことが明かであり、又日本書紀に推古天皇の廿八年庚辰秋八月、掖玖人二口、流來於伊豆

國、とあるものは季節上屋久島の住民が黒潮とタイフーンの爲に漂着したものであらうと思はれる。又天文十二年八月二十五日ビント等の一行が種子島に漂着したのもタイフーンの影響と黒潮の爲とではなかつたらうか。

次に九州本島に就いて見るに、日向、大隅、薩摩の國名は元來隼人部落の名稱であつたらしく古代に於ては薩摩、大隅の邊は日向と共に襲入國或は日向ノ國と云つたもので天孫降臨の日向國は即ち廣義と解すべく、熊襲國とは日本に大の字を冠すると同一なるべく又熊襲とは襲ノ國の英雄に附する敬稱で、宛も日本武尊の御名が大和の勇者の意であると云ふのと同一であらうと解するのも強ち牽強附會ではあるまい。而して天孫降臨當時に於ては是等の祖先は正しく南九州の國神であつたに相違ない。降臨の際兵を率いて護衛したのは天津久米ノ命等で、南方の民族たるを物語る神名らしく、又高千穗宮に於て南九州を經營せられるに當り、吾田長屋の

笠狹ノ碕(鹿兒島縣加世川)の笠狹宮に在つて國神大山祇神(大山津見)の子神阿多都比賣(神吾田鹿葦津姬)又の名木花開耶姬を納れて妃となし、茲に在來と新來との文化の混和が行はれて南九州即ち日向の文化の向上を來たしたと疑なく、又宮崎縣南部は舊藩政時代に於ても薩藩領であつて明かに地理的共通性の存在を示してゐると思はれる。想ふに日向の蘇の高千穂宮の所在亦北方の高千穂ではなく恐らく古代の日向の畧中央なる都ノ城近邊に之を求むべきであらう。そは兎もあれ所謂日向三代當時既に南九州に於て極めて顯著な人文的景觀が輝いたことは想像するに難くなく、勢力の増大、國力の充實は纏て政治的經濟的發展となり、殖民地の獲得となり、大舉移民となり、神武天皇の東征となつたものと思はれる。又一部には海上遙に東進又は漂流したのもあつたらう。

三、南 四 國

神武天皇が南九州を發して豐豫海峽を經、瀬

戸内海の北岸を東進して畿内に達せられた外に海上を東漸したのもあつたらうが僻遠の爲に古傳を失したに違ひない。高知縣に於ける先史系史時代の遺跡遺物に就いて概觀するに先づ最古のものの有力な一は西南端に近き幡多郡宿毛町字宿毛の貝塚で、石器時代の遺物として珍重すべきもの(高知縣史要)である。此の地たるや豐豫海峽に面するリアスの灣頭に位し先史系史時代の漁撈民族の居住地として尤なる地域であつたと共に、更に意義深きは此の地が古代に於て文化の華を輝した日向と一韋帶水の地であることとである。更に又眼を轉ずれば薩南より直接に海流の接する地點に極めて近いのである。例令神武天皇一派は瀬戸内海に航したとしても全部のものが北航したとは限るまい。即ち宿毛附近は南九州一派の意識的或は無意識的殖民地の一つであつたに違ひない。それが纏て有岡川の谷によつて四萬十川の下流地域に擴り宛もカルタゴの如く一國を爲して國造が置かれ古墳及び

式内社を留めたのである。

東部に於ては長岡郡稻生村下田（高知市の東南）等に石斧が發見されて居り、金屬時代の遺物の出土地或は所在地は主として高知平野附近及東方の海岸附近であり、今までに發見された古墳の分布を見るに、廣義の長岡平野（高知平野の中高知附近以東に對する筆者の假稱、他日説明する機會あるべし）を圍む山麓附近に限られてゐる。

更に古記録に現はれた高知縣を見るに古事記には伊邪那岐、伊邪那美の好男、美女の二柱の神が御合ひまして「子生淡道之穗之狹別島、次生伊豫之二名島、此島者身一而有面四、每面有名、故伊豫國謂愛比賣、讚岐國謂飯依比古、粟國謂大宜都比賣、土佐國謂建依別」とあるも、國造本紀には「波多國造、瑞垣朝（崇神）御世、天韓襲命、依神教云、定賜國造」とあり、之が高知縣に於ける國造の初であつて別に土佐國造なるものの存在した證據がない。然るに其の後「都佐國造、志賀高穴穗朝（成務）御代、長阿比古同

祖、三島溝杭命九世孫、小立足尼、定賜國造」とある。降つて天平十三年國衙の附近に國分寺の建立せられたのをみれば、國府は既に奈良朝の昔今の長岡郡國府村比江に在りしなるべく、平安朝に入つて紀貫之が國務を司つたことはかくれない事實である。

更に東部に於ける式内社の分布を見るに廣義の長岡平野近邊を主とし更に東部の海岸に沿ひ室戸岬に到る。

今是等を一括して見ると次の如く解釋且抽象することが出来る。古事記によれば先づ二柱の神が畿内から淡路の經略に着手され、次に四國に及んだのであるが、先づ順序として讚岐に手を染められ續いて海岸傳ひに西方伊豫に及び更に轉じて讚岐山脈を横斷し阿波に及び吉野川の溪谷に沿ふて上り、或は川之江、三島附近から石槌山脈或は劍山山脈の南側の地域を最後に發見し其の地を漠然土左と總稱した。併し其の當時はまだ中央文化は此の他に地理的發展を試み

るに至らなかつたが長岡平野附近の山麓地方等には未開の民族が居た。當時四萬十川下流地方一帯には文化の高い優等民族がゐたであらうが未だ中央とは没交渉であつた。其の後漸く中央集權的國家の確立に伴ふて人皇第十代崇神天皇の御代に天韓襲命を以て波多の國造と定め賜ふたのである。然るに其の後第十三代成務天皇の御代に初めて小立足尼が都佐國造に任命されたのである。當時の國衛の所在地は今推定し難きも波多の國衛は古墳及び式内社の分布に照らして四萬十川下流中村附近から宿毛の間であつたことは畧々疑を入れざる處であり、都佐の國衛は長岡郡岡^{をがふ}豐村中島の西端附近にあつたとの有力な考説があり疑もなく長岡平野であつたに違ひない。人或は往昔此の地は土佐、波多の二國に分立してゐたと爲し、吉田博士も亦「上古は都佐波多二國別立せるに似たり」(大日本地名辭書)と述べられて居るが、愚考を以てすれば古事記に現はれた最古の土佐は只漠然たる稱呼に過ぎず

後西南部波多(幡多)の文化が中央に存在を認められ畧々今日の高知縣及び南豫の地方が波多なる國名を以て呼ばれ、後一般文化の進歩と中央文明の進入と人口の増加と相待つて、生産力が大で従つて多くの人口を收容し得且畿内に近き長岡平野が核心部となるに及び都佐なる稱呼が此の國名と變つたもので、波多國と云ひ都佐國と云ふも畧々等しき地域であつて、文化中心の所在を示す時代的呼稱であつたと思ふ。是も亦一つの文明の東漸である。擬神の教によつて波多の國造と定められた天韓襲命とは抑々如何なる人物ぞや。吉田博士が「他書所見なし」と述べられた如く全く系統不明の人物である。思ふに中央より派遣せられた官吏ではなく南海の先輩であつて、一般には存在を認められざる西南の海上より浮んで來た文化民族又は其の子孫中の英雄であつたらうと思ふ。遙に降つて慶長元年マニラよりノビスパンヤに航海中の長さ三十間と云ふイスパニヤの商船が難破し浦戸沖に漂流

し來り浦戸に入港せしめたことは近世に於ける餘りにも顯著な事實であるが、寛政元年清國江蘇省乍浦の商船が安藝郡羽根村に漂着した際碇泊不便の爲、回航せしめんとした處が暴風に逢ひ紀州の大島に漂着した如き、又寛政七年福建省を出帆した琉球の船が幡多郡下田の海岸に漂着した如き、尙文化五年江蘇省崇明縣の商船が山東に趣く途中暴風の爲安藝郡室津の海岸に漂着し、又文政九年南京を出帆した江蘇省の商船が翌十年浦戸に漂着し、嘉永七年南京の商船が香美郡赤岡沖に漂流し、又近くは明治二十九年沖繩縣國頭郡谷茶村の谷茶丸が八重山航海中郡流して浦戸に來た如き實例は殆ど枚擧に遑あらぬ程である。

擬然らば土佐から漂流したものはなきかと云ふに、一二に止まらないが著しき一例を擧げんに、幡多郡中濱の少年萬次郎は漁業見習として十五歳春、天保十二年正月高岡郡宇佐より鰹船に乗じて（一行五人）出漁中暴風に逢ひ小笠原島の

南方なる一無人島（南島島ならんと云ふ）に漂着し、アメリカの捕鯨船に援けられ、マゼラン海峡を経て大西洋を航し、同船長ホワイトフィルドの撫育を受け嘉永五年（十二年月）歸國し、翌六年米艦渡來のことあるや拔擢せられて旗本となり、木村攝津守、勝海舟を援けて米國に航し、又通譯官となり後開成疊の中博士となり、大島、榎本、福澤等の門下生を出した。明治新政府唯一の外國通で近時正五位を追贈された中濱萬次郎氏（醫學博士中濱東一郎氏の父君）之である。

以上の數例に似通ふた事實は先史原史の時代を通じて多々あつたと思はれる。而して又土佐の東西の文化地域を結ぶものは主として海であつたらう。即ち前述の如く古代の遺物遺跡乃至式内社の分布が高岡郡の山地を境界線として明らかに東西に區分されて居る點からも領かれるのである。即ち土佐に於てこの山地が極めて交通不便を極め入口亦極めて稀薄であつて陸上からの交渉の勤かつたことが覗はれるのである。

又房總半島に關し、

古語拾遺に「神武天皇、遣天太玉命孫天富命、更求沃壤、分阿波齋部、率往東上、播殖麻穀、其所居便名安房郡是也」と傳へ、安房なる國名は忌部が阿波より移れると共に起つた（吉田東吾氏地名辭書）と云ふのであるが、千葉縣安房郡館山の南方に安房神社があり式内大社で太玉命を祀り又安房神社と館山との間に洲の宮があり太玉命の後神を祀り之が神武天皇元年辛酉創建と傳へらるゝを見れば因縁深きものたるは明らかであるが、是亦事極めて古代に屬するを以て沃土を求めて東進するに當つて海路を採つた事が明らかである。即ち當時に於て陸路を採る事は甚だ困難な事情の存在したのと、一には陸路を進んだとしては勢ひ濃尾の平野を捨てて何を苦んで房總の尖端を求めたかの問題である。故に本件も亦文明の海上東漸の一證と爲すものと考へられる。

四、近畿の南岸

轉じて紀伊半島の南岸を見るに、五瀬命は孔舍衛（目下之蓼津）に重傷を負はれ神武天皇は軍を班して南下し紀伊水道を出で、熊野から紀伊山脈を横斷して大和の平野に出られたとは記、紀の記す處であるが、この傳說的記事は即ち一の神話に過ぎない爲、參考資料として、他面から考察する必要を痛感するのである。

壯年の侵蝕を受け而も木ノ國の名に負う峨々たる深山幽谷で現在とてもさることながら二千數百年の昔に於ては例令八咫鳥の如き國巢がゐて東道したとしても、大和の平野には當時既に饒速日命を頂く長髓彦等の強國が存在したもので、この強大な勢力に對して壓倒的な大軍を熊野路から差向けることは不可能であつたと思はれるし、又熊野に着いた軍勢が微々たるものであつたことは記、紀によつても想像されるのである。

想ふに皇軍は道臣命を先鋒として紀ノ川の地溝帶を登り、吉野河の構造谷で國神寶持子及び

井冰鹿を降すや石押分子等は出で降り、茲で勢揃をなし、國神の案内で龍門傾動地塊を横斷したと解すべきであらう。

然らば熊野に關する古傳は如何に解すべきであらうか。皇軍の一派としての別動隊であるかもしれないが又時を異にして瀬戸内海を東漸し太平洋に出でたものかも知れぬ。併し吾々は南九州から瀬戸内海を経て、畿内に上陸したもののあつたと同時に太平洋岸を意識的及び漂流して來たもののあつたことを否定し得ぬのである。

兎に角熊野に回航したのは神武天皇の本隊ではなかつたと思はれるが、日本書紀には「一行が太平洋岸を航海する途中暴風に遇つた時稻飯命が吾祖は天神であり母は海神であるのに我を陸に海に苦しめると歎いて海に投じ、三毛入野命も亦我母も姨も海神なるに波瀾を起して灌溺すと浪秀を踏んで常世郷に往かれ、天皇は獨り皇子手研耳命と軍を帥ゐて熊野荒坂津に御着になつた。しかしこゝには丹敷戸畔と云ふものが居

て、誅しはしたが熊野で皇軍は殆ど全滅の狀態に陥つたとある。概觀するに此の優等民族は西方海上から風波にもまれて來た天神で、併も祖先代々海神系であることはいなみがたく、又到着地には先住民族がゐて激戦したことも明らかであるが兎に角此の地が一の植民地となつた事は畧々確實で、在來の文化に加へて新來の文明を以てし僻遠の併も平地に極めて乏しい地域にも拘らず領土の膨脹を來たし熊野國くまのくにとなつたことは、國造本紀に「熊野國造、志賀穴穗朝（成務）御世、饒速日命五世孫、大阿斗足尼定賜」とあるによつて明らかであり、波多の國造より遅れて都佐の國造と殆ど同時に任命せられたもので中央から派遣せられたものと見える。

而して皇軍は軍を分つて東方伊勢を平げしめられたと云ふ。之も亦明かな海路文明の東漸である。又徐福塚も大陸よりの大舉移民の一證と爲すを得んか、尙既述の如く入唐副使吉備眞備の乗船も歸朝の途次薩南の益久から流れて天平

勝寶六年正月牟漏崎、即ち潮岬附近に漂着したし、幕末に土佐の東岸から紀州大島に漂着した江蘇省の商船のあつたことは前に記した通りである。

又小田内通敏氏によれば和歌山縣人で房州や銚子に植民したものがあり、北條などには現に熊野神社の氏子となつてゐるものが多く、又上總國匝瑳郡の松澤權現(熊野神社)は桓武天皇大同四年紀州熊野から神官に擁せられて九十九里濱の三川に漂着し後松澤の地に移つたと云ふ。又更に千葉大系圖には匝瑳郡松山有松山神祠、祀熊野神。(吉田東吾氏地名辭書)、又東鑑文治二年の條に匝瑳南莊熊野領とあり頗る因縁の淺からぬを物語るものである。

更に伊勢志摩を見るに往昔國境の異動甚しく従つて伊勢の南部と志摩とは分明に分ち難く、南伊勢と云ひ志摩と云ふも或程度まで之を同一の地域と解せられる。既述の如く天孫が南九州に降臨の當時既に國神瓊田彥が居つてその案内

で皇孫が高千穂御經營の際瓊田彥神は伊勢狹長田の五十鈴の川上に到るに當り、天神一派の天鈿女命を所望した。天鈿女命は乞はるゝまゝに侍送る。時に皇孫は天鈿女命に對して瓊女君の姓を賜つて遣はしたとある。かくして伊勢志摩の地方が開拓されたものと見える。

五、伊豆に於ける漂着民

茲で再び伊豆に立戻つてみよう。既述の如く推古天皇廿八年掖玖(屋久)島の住民二人が當國に漂着し、又古今著聞集に「承安元年辛卯七月八日。船一艘抵伊豆沖島。登岸八人。長可皆八九尺。反首猿目。裸體而纏編蒲。刺繡遍身。執大杖。而皆無言。島人以爲是鬼。乃試與之梁酒。則歡若馬飲。既而見島人持弓矢而乞之。不與。即怒呼喚。杖殺五人。或被傷。島人大懼。出神弓且射之。於是輒沒海上。船來風去。十月狀其事。而與遺帶。上之國司。帶乃藏諸蓮華王院神庫」とあり、正しく異人種で併も文身を爲せるを見れば所謂天孫系統にあらざることを物

語るもので、寧ろ熊襲或は隼人との類縁を物語るやうであるが恐らく南洋土人であつたらう。又久米が來たとの古傳もある。清水氏の研究によれば、半島の西北端西浦村大瀬崎は南紀井よりの漂流者の落着した處で、其東方なる江裂に子孫多く、尙同村には薩摩人の漂着せるものあり、又半島西岸の戸田村井田には中部支那或は南支那よりの漂着ありしものの如く、同地に在る數十の古墳群ある地字を松江と稱するは其の證とすべきやうである。更に亦相房の地へ漂流したのもあつたと云ふ。

斯くの如く有史時代に入つて明かに記錄に記つたものがあり、中央に其の存在を認められざるにせよ、口碑の今に存するものある如く、先史原史の時代を通じて漂着者は多々あつたことと思はれる。

尙前陳の如く式内社が土地狹小に比して多く特に賀義郡に於てはそれが島嶼と海岸に多いこと、又半島内に三島神社が二十六座の多き上に

り併も之が海岸に限られてゐる如き、又以て海から文化の進んだことを證する一資料と爲すに足るのである。扱豆南諸島は三島郷と稱した時代もあつたが此の三は御に通じて敬稱であるらしいが、又三は海に通じて海島の總稱で三島明神とは海島を總ぶる神の意であるらしい。豆南諸島に繁榮した三島明神の多くの妻子と云ふは恐らく一族一統乃至一の文化團體の總稱と解すべきであるが、然らば此神の正體は何であらう即ちここが事代主と云ひ大山祇と互に論ずる所以である。事代主とせば三島大社明細帳の如く出雲を出、西南日本の太平洋岸を東進したものとすべきであらうが、事代主を祭る神社は殆ど全國の津々浦々にある處から見れば出雲民族が出雲朝廷の没落と共に四散したとしても其の範圍が餘りにも廣すぎ、従つて事代主を祭るもの必ずしも出雲系にあらざるべしとの考へを起さしめ、又陰曆十月を以て神無月となすものを全部出雲系となさんか、全國に出雲系ならざるもの

は寧ろ稀となる。三島大社の祭神は依然として三島明神で、豆南の神は其の一團一統の文化民族であつたこと殆ど疑ふ餘地なく、又后妃は伊豆の國神であつたらしい。即ち前記三島大社所藏の白濱神社古傳書の抜粹を見ても天竺の王子が豆南の島で后妃を求められたとあるによつて明かである、皇孫は天鈿女命の如き女神を伴ひ所謂浦島太郎の如き婦人を伴はぬ單獨移民ではないが、國神木花開耶姬を納れて妃となしたことは所謂桃太郎の如き奪略移民でなかつたことは明らかである。

六、結 論

擬以上によつて通覽するも中部支那方面よりの漂流極めて多く、所謂天孫民族なるものの全部が傳ふる如く必ずしも高天原より朝鮮半島を経由したと考へる必要なく或者は直接に南九州に渡來し、又全部が必ずしも瀬戸内海を東航したと考へる必要がないと信ずるのである。而して九州以東の太平洋岸に就いての民族移動を概

觀するに、中には熊野神社の一部の如く西進したのもあつたらうし、又一足飛に東航したのも相當あつたことは畧々確實と思ふけれども全體から見れば宛も梅雨期の低氣壓の如く、次々に後から／＼と進み或はリレーレースの如く前へ／＼と進んで千島海流の障碍なき範圍に擴まつたものと思はれる。而して之等は主として漂流で、併も主として男子であつたと斷定しない。中には新來の男神が恐れを爲した國神の猿田彦と應對した天鈿女命によつて代表される如き大膽な女神も少數はあつたらうけれども、上古に於て海を航するものは主として男子であつたこと、現代に於ても出漁するものは主として男であること之であり、古傳又新來の男神が土着の女神と結婚したことを傳へるのもこれらの消息を如實に物語つてゐる。

又高級文化を持つ有力な青年男子が僻遠低級文化の地に來た場合を想像するならば土着の若い女神は親神諸共に新來の所謂天神に接するを

以て光榮としたに違ひない。

古事記に皇孫が神阿多都比賣(木花之佐久夜比賣)をみそなはし其父大山津見神(大山祇神)に所望した處、父なる神は大いに歡び姉娘石長比賣をも副へて百取の机代の物を持たしめて奉つたとあるのでも充分諒解されると思ふ。三島明神にしても豆南の島で得られた五人の后妃が各々別箇の島に居たことは前記白濱神社古傳書の内に見える事實で五人の女神は數ある乙女の中名譽の榮冠を勝ち得たもので決して日蔭者ではなかつたのである。而して又同古傳書に數多の后妃に各數多の御子神を生じ、狭小な土地に於て后妃が互に己が子神の領分の廣からん事を欲して勢力争を生じ、夫に惱んだ舉句三島明神は壬生御館を伴ふて白濱へ移つたと云ふ如き全く無形の神の業ではなく、現人神の所業たることを如實に物語つてゐると思はれる。

要するに祭神は事代主命にはあらざるべく、さりとて大山祇命とも決しがたく、又高天原

から海路直航したかも知れぬけれども、恐らく古代に於ける廣義の日向國ひむかの海岸地方から海路東漸した文化民族中の英雄で海神系であるから古名を復活して三島明神とするか、さなくば伊豆國開拓の大先輩であるから是を「伊豆武命」と尊稱したい。

更に其の一團は繁榮と共に南部—豆南諸島及奥伊豆の海岸地方—の狭小な地域に甘んぜず河津川の構造谷を登り、天城峠を越えて狩野川構造谷を下り、田中村地方に一大谷口聚落を作つたもので、此の際遷座にせよ勸請にせよ氏神たる三島明神を奉戴して北進したものたるは殆ど疑ふ餘地なき確定的事實であると思ふ。之が遇ま國司の奉祀する處となり、南方に残つたものは遂に京都文明から取殘された形となつたもので、獨り三島大神が榮えることとなつたと思ふ。白濱には白濱神社、田京には廣瀬神社として妃の宮を留めたことは誠に意義深いことであり殊に原家が北方に隨行せず白濱に留まつたこと

は優にやさしい限りである。

要するに古代に於て北方から南進し遺物遺跡を留めた古來の民族と、其の一派かと思はれる火神系の伊豆山權現等によつて代表される神々と、海上を浮んで來た新來の民族との衝突もあつたらうが又北方派の壬生の御館が海神系の南方派の天竺の皇子を徹頭徹尾援けた如く、渾然融合した南北兩文明の總積算が南部の進んだ文化であつたと思ふ。壯丁検査の結果賀茂郡の青年が田方郡のそれに比して身長の大なる如きも亦注意に價する問題であり、八丈島を始め豆南諸島の婦人の頭髮の長きと共に意義のあるものと思はれる。

兎に角三島の三島神社は延喜式にはないが伊豆の國司に祭られてゐたし、以仁王の令旨を得て治承四年源賴朝が山木判官を攻めた如きは三島神社の縁日で山木の家來が參拜して遊んでゐる虚を衝いた事實に徴しても、延喜と治承との間に遷宮のあつたことは明かである。三宅島か

ら白濱へ、白濱から田京へ、田京から更に三島へ遷座したであらうことは南部の文化團體が三島神社を奉戴して南方から段々北進した事實を物語るものであらうと同時に國司が偉大な勢力を持つ神を奉祀することとなつたものと思ふ。此の遷宮或は勸請は可成重要な意義を持つものであり、又文化北進の最後のものではあつたらうと思はれる。重要な意義を持つとは、他にも事情はあつたらうけれども三島神社を奉戴する一派の文化は高く且勢力が大であつた爲に國司が此の神を總社として祭つたものであらうし又北進の最後のと云ふのは神功皇后の攝政時代に若建命が伊豆國造となり、次いで國司の赴任したのは天孫文化の力強い進入であり、且又此の地が遠流の國となつて天武天皇以來上方文化が流込むやうになり、平安朝末期になつては最早從來の文化は京都文明の爲に閉息してしまつたからである。

終りに臨み、見學に當り又執筆に當り直接間

接背後の力となつて下さつた藤田教授及び静岡
縣史編纂委員、静岡縣史蹟名勝天然記念物調査

委員清水吉彦氏に對して深甚の謝意を表するも
のである。(完)

伊 太 利 と こ ろ ぐ (三五)

瀧 川 規 一

「ヴェニス行」伊太利を歴訪する者にしてヴェ
ニスを見逃がす人はなからう。ヴェニスに訪れ
た人にして名物のゴンドラに乗らなかつた人は
なからう。ゴンドラに興を覺えた人にして聖マ
ルコ寺の廣場に群れ居る鳩の鳴く聲に耳を傾け
ぬ人はなからう。聖マルコの廣場に佇む者は三
方に取り圍む拱廊と寺院の前の時計塔に注意す
るであらう。

サン・マルコの内陣を拜した者は隣接の太公
宮殿(Ducal Palace)内の繪畫を巡覽した後、「歎
きの橋」(Ponte dei Sospiri)を見るであらう。

この歎きの橋は歐洲各地に見出される同形の橋
の原型である。

停車場に着くと、幾艘となく客待ちをしてゐ
るゴンドラ舟の舵手が客の奪ひ合ひをする。異
國人は少からずそれが爲めに迷惑を感ずる。言
語が通じない時に自分の手荷物がどのゴンドラ
に拉し去られたか判らぬ。落着先のホテルが確
定して居らぬ時にはゴンドラを呼び止めんとす
るにも言語が通じない。斯くして驛前のゴンド
ラ船で度膽を抜かれた邦人もある。それをしか
も得意氣にものに書いてゐる人もある。こんな